

第4問 『源氏物語』は書き写す人の考え方によって本文に違いが生じ、その結果、本によって表現が異なっている。次の【文章

I】と【文章II】は、ともに『源氏物語』(桐壺の巻)の一節で、最愛の後である桐壺の更衣を失った帝のもとに、更衣の母から故人の形見の品々が届けられた場面である。【文章I】は藤原定家が整えた本文に基づき、【文章II】は源光行・親行親子が整えた本文に基づいている。また、【文章III】は源親行によって書かれた『原中最秘抄』の一節で、【文章II】のように本文を整えたときの逸話を記している。【文章I】～【文章III】を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。

【文章I】

かの贈りもの御覽ぜさす。^(注1)亡き人の住みか尋ねいでたりけむ、^(ア)しるしの釵ならましかば、と思ほすも、いとかなし。

(イ)

尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこ知るべく

絵に描ける楊貴妃の容貌は、^(注2)いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。^(注3)太液の芙蓉、未央の柳も、げに通

ひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべきかたぞなき。

【文章II】

かの贈りもの御覽ぜさす。亡き人の住みか尋ねいでたりけむ、しるしの釵ならましかば、と思すも、いとかなし。

尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこ知るべく

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師と言へども、筆限りありければ、いと匂ひ少なし。太液の芙蓉も、げに通ひたりし容貌・色あひ、唐めいたりけむよそひはうるはしう、けうらにこそはありけめ、なつかしうらうたげなりしありさまは、女郎花の風になびきたるよりもなよび、撫子の露に濡れたるよりもらうたく、なつかしかりし容貌・気配を思し出づるに、花鳥の色にも

音にも、よそふべきかたぞなき。

(注) 1 亡き人の住みか尋ねいでたりけむ、しるしの釵——唐の玄宗皇帝と楊貴妃の愛の悲劇を描いた漢詩「長恨歌」による表現。玄宗

皇帝は、最愛の後であった楊貴妃の死後、彼女の魂のありかを求めるように道士(幻術士)に命じ、道士は楊貴妃に会った証拠に金の釵を持ち帰った。

2 絵——更衣の死後、帝が明けても暮れても見ていた「長恨歌」の絵のこと。

3 太液の芙蓉、未央の柳——太液という池に咲いている蓮の花と、未央という宮殿に植えられている柳のことで、いずれも美人の形容として用いられている(「長恨歌」)。

【文章Ⅲ】

亡父光行、昔、五条三品にこの物語の不審の条々を尋ね申し侍りし中に、当巻に、「絵に描ける楊貴妃の形は、いみじき絵師
(注1)と言へども、筆限りあれば、匂ひ少なし。太液の芙蓉、未央の柳も」と書いて、「未央の柳」といふ一句を見せ消ちにせり。
(注2)これによりて親行を使ひとして、

「楊貴妃をば芙蓉と柳とにたとへ、更衣をば女郎花と撫子にたとふ、みな二句づつにてよく聞こえ侍るを、御本、未央の柳を
(注3)消たれたるは、いかなる子細の侍るやらむ」

と申したりしかば、

「我は(注4)いかでか自由の事をばしるべき。行成卿の自筆の本に、この一句を見せ消ちにし給ひき。紫式部同時の人に侍れ
(注5)ば、申し合はする様こそ侍らめ、とてこれも墨を付けては侍れども、いぶかしさにあまたたび見しほどに、若菜の巻にて心をえ
(注5)て、おもしろくみなし侍るなり」

と申されけるを、親行、このよしを語るに、

「若菜の巻には、いづくに同類侍るとか申されし」

と言ふに、

「それまでは尋ね申さず」

と答へ侍りしを、さまざま恥ぢしめ勘当し侍りしほどに、親行こもり居て、若菜の巻を数遍ひらきみるに、その意をえたり。
(注6) 六条院の女試楽、女三の宮、人よりちいさくうつくしげにて、ただ御衣のみある心地す、にほひやかなるかたはをくれて、いとあてやかになまめかしくて、二月の中の十日ばかりの青柳のしだりはじめたらむ心地して、とあり。柳を人の顔にたとへたる事あまたになるによりて、(エ) 見せ消ちにせられ侍りしにこそ。三品の和才すぐれたる中にこの物語の奥義をさへきはめられ侍りける、ありがたき事なり。しかあるを、京極中納言入道の家の本に「未央の柳」と書かれたる事も侍るにや。又俊成卿の女に尋ね申し侍りしかば、

「この事は伝々の書写のあやまりに書き入るるにや、あまりに對句めかしくにくいけしたる方侍るにや」と云々。よりて愚本にこれを用いず。

(注) 1 五条三品——藤原俊成。平安時代末期の歌人で古典学者。

2 見せ消ち——写本などで文字を訂正する際、もとの文字が読めるように、傍点を付けたリ、その字の上に線を引くなどすること。

3 御本——藤原俊成が所持する『源氏物語』の写本。

4 行成卿——藤原行成。平安時代中期の公卿で文人。書道にすぐれ古典の書写をよくした。

5 若菜の巻——『源氏物語』の巻名。

6 六条院の女試楽——光源氏が邸宅六条院で開催した女性たちによる演奏会。

7 京極中納言入道——藤原定家。藤原俊成の息子で歌人・古典学者。

8 俊成卿の女——藤原俊成の養女で歌人。

問 1 傍線部(ア)「しるしの釵ならましかば」とあるが、直後に補うことのできる表現として最も適当なものを、次の①～⑤の

うちから一つ選べ。解答番号は

1

。

- ① いかにうれしからまし
- ② いかにめやすからまし
- ③ いかにくやしからまし
- ④ いかにかしからまし
- ⑤ いかにあぢきなからまし

問2

傍線部(イ)「尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそこ知るべく」の歌の説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 2。

- ① 縁語・掛詞は用いられていない。
- ② 倒置法が用いられている。
- ③ 「もがな」は願望を表している。
- ④ 幻術士になって更衣に会いに行きたいと詠んだ歌である。
- ⑤ 「長恨歌」の玄宗皇帝を想起して詠んだ歌である。

問3 傍線部(ウ)「いかでか自由の事をばしるべき」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番

号は

3

。

- ① 勝手なことなどするわけがない。
- ② 質問されてもわからない。
- ③ なんとかして好きなようにしたい。
- ④ あなたの意見が聞きたい。
- ⑤ 自分の意見を言うことはできない。

問 4 傍線部(エ)「見せ消ちにせられ侍りしにこそ」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選

べ。解答番号は 4。

- ① 紫式部を主語とする文である。
- ② 行成への敬意が示されている。
- ③ 親行の不満が文末の省略にこめられている。
- ④ 光行を読み手として意識している。
- ⑤ 俊成に対する敬語が用いられている。

問5

【文章Ⅱ】の二重傍線部「唐めいたりけむ」思し出づるに」では、楊貴妃と更衣のことが、【文章Ⅰ】よりも詳しく描かれている。この部分の表現とその効果についての説明として、**適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。** 解答番号は 5。

- ① 「唐めいたりけむ」の「けむ」は、「長恨歌」中の人物であった楊貴妃と、更衣との対比を明確にしている。
- ② 「けうらにこそはありけめ」という表現は、中国的な美人であった楊貴妃のイメージを鮮明にしている。
- ③ 「女郎花」が風になびいているという表現は、更衣が辛薄く薄命な女性であったことを暗示している。
- ④ 「撫子」が露に濡れているという表現は、若くして亡くなった更衣の可憐かれんさを引き立てている。
- ⑤ 「○○よりも△△」という表現の繰り返しは、自然物になぞらえきれない更衣の魅力を強調している。

問6

【文章Ⅲ】の内容についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6。

- ① 親行は、女郎花と撫子が秋の景物であるのに対して、柳は春の景物であり、桐壺の巻の場面である秋の季節に使う表現としてはふさわしくないと判断した。そこで、【文章Ⅱ】では「未央の柳」を削除した。
- ② 俊成の女は、「未央の柳」は紫式部の表現意図を無視した後代の書き込みであると主張した。そして、俊成から譲られた行成自筆本の該当部分を墨で塗りつぶし、それを親行に見せた。
- ③ 光行は、俊成所持の『源氏物語』では、「未央の柳」が見せ消ちになっていることに不審を抱いて、親行に命じて質問させた。それは、光行は、整った対句になっているほうがよいと考えたからであった。
- ④ 親行は、「未央の柳」を見せ消ちとした理由を俊成に尋ねたところ、満足な答えが得られず、光行からも若菜の巻を読むように叱られた。そこで、自身で若菜の巻を読み、「未央の柳」を不要だと判断した。
- ⑤ 俊成は、光行・親行父子に対しては、「未央の柳」は見せ消ちでよいと言っておきながら、息子の定家には「未央の柳」をはっきり残すように指示していた。それは、奥義を自家の秘伝とするための偽装であった。